

アニメの劇伴音楽ではなく、コンサートホール・ワークとして生まれ変わった新しい作品、〈逢燦杰極〉の初演です。

山城組オリジナル・チューニングの5音階ジェゴグは二〇〇六年にバリ島の名手の手で完成し、その潜在力を存分に発揮させ日本の気候の中でその豪壮芳醇な響きを轟かせるための丹念な調整と改良、作品の再構築をはかりつつ現在に至っています。第三章では、このジェゴグを不可欠の土台としながら、それとの親和性、協調性の著しいさまざまな文化からの楽曲や祈りを共生させ、さらにパイプオルガン・シンセサイザーを含む鍵盤楽器、電子楽器、打楽器、そして人の声がひとつに駆け合った新たな表現システム〈逢燦杰極〉がお目見えします。

### 1 金田

「〈祭り〉と〈レクイエム〉という対極的な2本の柱で『AKIRA』の音楽

がジェゴグによるドローン（通奏低音）にのせてたち現われ、美しい響きが鉄雄を悼むかのように静かに流れていきます。

なおこの〈変容〉と続く〈荘厳陀羅尼〉の2曲では、ジェゴグは竹を1本かけ替えて異なる音律で演奏します。

### 4 荘厳陀羅尼

映画『AKIRA』がネオ東京の一断面として予言的に描いた「ミヤコ教」という新興宗教の祈りの場面で登場する声明にジェゴグを加え、〈杰極〉として新たに構成した作品です。

苦しみを象徴するかのような低い唸り声のなか、木鉦と句頭の唱える陀羅尼に先導され、声明とジェゴグが次第に昇りつめ、祈りの熱狂が盛り上がっていきます。楽譜で表わすとまったく同じひとつの音程をたどるだけのユニゾンが、四分音符にして三百回近くひたすら繰り返されるという、もしくはすると実用化された音楽の中で世界最多回数に達するかもしれないスーパー・オステナートが持続します。もっとも単純な「音の繰り返し」であるにもかかわらず、音楽としては波乱万丈の展開として感じられてしまう不思議

を創ってほしい」という大友監督の要請に応え、〈祭り〉のイメージを凝縮して創られたのが、主人公・金田の名を冠したこの曲です。金田を中心とした「健康優良不良少年」たちが都市の廢墟でくりひろげる破壊的な祭りが、〈ジェゴグ〉の重低音の乱舞と勇壮なビートに乗って展開します。

野性味あふれるサウンドから始まるイントロでは、手造り楽器ならではの不揃いで朴訥な音そのものが切々と心に迫り、そこにコーラスが加わると少年たちの想いが一気にヒートアップして伝わってきます。「ラッセラ」という〈ねぶた祭り〉の掛け声と電子楽器、そしてジェゴグのビートが火花を散らす疾走感の中に、少年たちの祭りは最高潮に達します。

今回使用する〈ジェゴグ〉のオリジナル・チューニングは、その最低音の音高を可能な限り低く設定したものです。それによって初めて引き出された迫力ある重低音を最大限活かすために、ややどっしりしたテンポで演奏します。

### 2 クラウンとの闘い

バイクで疾走する金田たちの前に立

な音世界が、〈杰極〉の表現力の一端を示しています。

### 5 ケイと金田の脱出

ヒロインのケイと金田が、潜入したラボの地下施設でアーミーの攻撃を受け、脱出する場面のために創られた軽快な曲です。なじみやすいポップ・ミュージックの形式と一体化するうえで、この作品のために開発された5音階ジェゴグは絶大な効果を発揮しています。伝統的なジェゴグの1オクターブは、西洋の音階で近似すると「ラ・ド・ミ・ソ」に近いわずかに4音の独特の音階で、標準的には楽器1台に1オクターブ4本が二組または2オクターブ8本の竹が並びます。それに対してさらに1音を加えて、西洋の音階の「ラ・ド・レ・ミ・ソ」に近い音律を形成し、合唱や電子楽器との融合を進め、より豊かな表現の追求を可能にしたのです。

どこまでも走り続けるジェゴグの低音部のパワフルなリズムの中に金田のテーマのバリエーションが現れ、銃撃のように弾む高音部の掛け合いとともに、軽快なシンセサイザーやドラムが交錯しながらスリリングに展開します。

ちはだかるのは、敵対するドラッグ中毒者のグループ「クラウン」。この二つの暴走族の闘いをテーマにした曲で、『AKIRA』を代表する音楽として〈金田〉と並ぶ人気を博しています。

この曲の決定的な特徴は、「バッター……」という苦しい気な〈息遣い〉です。およそ〈音楽〉とは程遠い声ですが、作曲家山城は、このようなたぐいの息の操作が人間の表現行動として社会的に成り立ちうることを、エチオピアに住むゲレ人たちの祈りの声を通じて察知しました。これに息遣いによるケチャリズムをさらに加えて暴走族グループ・クラウンのテーマが、「誰も聴いたことのないサウンド」で表現されます。そのさなかへ、ジェゴグの奏でる金田のテーマが突入し、クラウンたちとの乱闘が、ジェゴグの重低音と息遣いとという対照的なサウンドのせめぎ合いとして描かれます。反発しあっていた両者は次第に混ざり合い、金田のテーマの中に集約されていきます。

### 3 変容

〈変容〉は、鉄雄がモンスター化してゆく不気味な過程とその結末を、斬新な手法を凝らした多重合唱と電子

### 6 未来（レクイエム）

大友監督が山城組の音楽に望んだ〈祭り〉と〈レクイエム〉。このレクイエムは、鉄雄、アキラ、そしてすべての傷ついた生命を悼むとともに、その復活・再生による未来への希望を託して、〈未来〉と名付けられました。

鳴り響く太鼓の余韻の中から、〈レクイエム・エテルナム〉が唱い出され、ラテン語で「鉄雄、平和に眠れ……」「アキラ、永遠に眠れ……」と歌われます。続く〈無言歌〉では、言語を介さず声の響きだけで祈りが表わされます。次いで、無言歌のメロディのバリエーションが、ロック調オルガン・シンセの甘く可憐なトーンによってインヴェンション風に奏でられます。それは間もなくトッカータ風の重厚なサウンドに転じ、その後、再び柔らかなバロック・オルガンの音に戻ります（これらのオルガンパートの一部は、本公演のために新たに書き下ろされたものです）。オルガンに導かれて再現したレクイエムの合唱と同期しながら、サンスクリット語による〈呪〉が16ビートで熱く唱えられます。呪の絶唱が頂点に達するや、曲は急転してジェゴグによる〈金田のテーマ〉が〈祭りの回想〉



楽器、パーカッションを駆使した複雑な展開の中で描きつくした楽曲です。今宵はこの楽曲にジェゴグを導入し、これまでにない手法を凝らした新しいスタイル〈杰極〉で演奏します。

ジェゴグによる〈変容〉のメインテーマの演奏ののち、男声による地底に蠢くようなトーンクラスタがバリ島のケチャ風の16ビートを超スローペースで刻みながら次々と折り重なり、鉄雄の苦悶を暗示します。そこに、大無量寿経の一節〈應時普地〉の男声合唱が加わります。それらの重苦しい音世界の中から一転して、澄み切ったブルガリア風の女声合唱による〈應時普地〉

として甦ります。ジェゴグの躍動するリズムに支えられつつ、〈金田〉の合唱、レクイエムの合唱が重層的に共生を展開しクライマックスを迎えます。そして一気に沈静し、〈無言歌〉と同じ旋律が「ねむれ、アキラ……」という祈りの言葉で歌われる〈ねむれ〉へと続き、最後は二重合唱によるコーダで静かに完結します。

このような構成を可能にしたのは、テンポやピッチ、音律や音階といった音楽の「規格」をいくつかの系統に体系化し、同一系統内の〈音のモジュール〉を、それぞれ独立して扱えるだけでなく、互いに音楽的に共存可能なように創ったことにあります。作曲家・山城は『交響組曲AKIRA』を映画音楽とするために自ら開発したこの方法を〈サウンド・モジュール方式〉と名付けました。この方式によって、〈祭りの回想〉では〈レクイエム・エテルナム〉〈呪〉〈金田〉が矛盾なく同時に演奏されます。緊密な統一感を持ちながら、異質なものの共存、時間的な回帰性などを実現可能にすることによって、より壮大でよりドラマティックな音楽が構成されているのです。

（仁科エミ・小野寺英子）

# 『交響組曲 AKIRA』から 「逢燦杰極」へ

## 『交響組曲 AKIRA』の誕生

「私の方から山城氏にお願いしたのは、いかに（劇伴）的な方法は避け、金田たちやクラウンなどの暴れ回る様や、デモやテロの横行するネオ東京のアーキエナ状況をひとつの（祭り）として捉えて、それをあらかず曲と、映画の最後に、そうした激しさのまったく対極にあるような（レクイエム）的な要素の曲を設定。それらを二つの柱として、（山城組としての音楽「アキラ」）を作ってもらい、それを映画音楽として使わせていただきたい、ということでした。」（大友克洋『交響組曲 AKIRA』ライナーノーツより）

一九八七年の暮れ、組頭・山城祥二は大友克洋氏が監督をつとめる翌年夏公開予定のアニメ映画『AKIRA』の音楽制作の打診を受けました。ところが漫画『AKIRA』の熱烈なファンでもあった山城は、このお誘いにも上ない喜びと驚きを感じながらも、引き受けることはしませんでした。音楽の専門教育を受けていないアマチュ

アの作曲家であり、レコードやCM音楽で国内外の権威ある賞をいくつか受賞してはいるものの映画音楽にはまったく門外漢だったため、「不器用で経験もない自分があえて無理をするより、世界の優れた音楽家を起用する方が作品にとっていいに決まっている」と考えたのです。しかも、「アキラ製作委員会を中心である講談社の傘下にはキングレコードという巨大なレコード会社があり、そのチャンネルを使えば世界最高峰のアーティストをいくらかでも起用することが可能でした。

しかしそれに対する大友監督の答えは、新たに作曲するのが無理ならば、山城組の『輪廻交響楽』を使わせてもらえないか、という山城にとつてさらに驚愕の要請でした。のちのインタビューでも大友監督は芸能山城組の起用理由について、「音楽をどうしようか、かなり悩んでいて。……最後は非常に静かな世界にもっていかうと思っていたので……合唱にしたいの

イメージを伝えるとともに、楽譜を自動生成するという当時としては最先端の作曲法を開発しました。しかし電子音の音色は限られ、山城の目指すサウンドをイメージすることには困難が伴い、しかもマルチトラック・レコーディングにより歌や楽器ごとに個別収録が行われたため、録音に参加したメンバーも公開時にできあがった音楽を聞いて驚嘆とともにその音

下で練り上げた響きの録音が実現しました。そして、収録したトラックはスタジオで山城自ら参加して高田英男チーフミキサーとともにミキシングされ、妥協のない徹底的な音づくりが行われました。このようにして映像と独立して完成した『交響組曲 AKIRA』は、映画では使われなかった楽曲も多く含む作品となっていました。

曲の収録は一九八八年三月から五月にかけて、東京青山のビクタースタジオといくつかのコンサートホールを使って行われ、メンバーは授業や仕事が終わるとスタジオに向かい、始発電車で帰宅するようなハードな日々を過ごしました。この時期の温度湿度は熱帯生まれの楽器ジェゴグにとってはいきわめて過酷なもので、厳しい乾燥にさらされた竹は、収録の都度、音の高さが微妙に変わってしまい、現場で竹を削るチューニングを頻繁に行わなければなりませんでした。（未来）の

『交響組曲 AKIRA』の作曲および収録の間、驚くべきことに大友監督と山城との間での打ち合わせや交流はほとんどありませんでした。大友監督の拠点マッシュルーム・スタジオに山城が初めて陣中見舞いで訪問した時、以前届けた（金田）のサンプルテープを大音量で流しながらアニメーターの方々が作画をしている光景を目にし、山城はようやく大友監督の英断に伝えることができているという手ごたえを感じたといいます。

コーラス収録では響きのよいコンサートホールを厳選し、さらにホールのなかでの合唱団の配置やマイクアレンジをさまざま試行して、最高の条件

近未来のイメージを伝統的な民族音楽の音によって表現する発想のみならず、人間の声をこれほど多彩に用いたサウンドトラックは前例がありません。アメリカでの『AKIRA』試写でジョージ・ルーカスとスティーン・

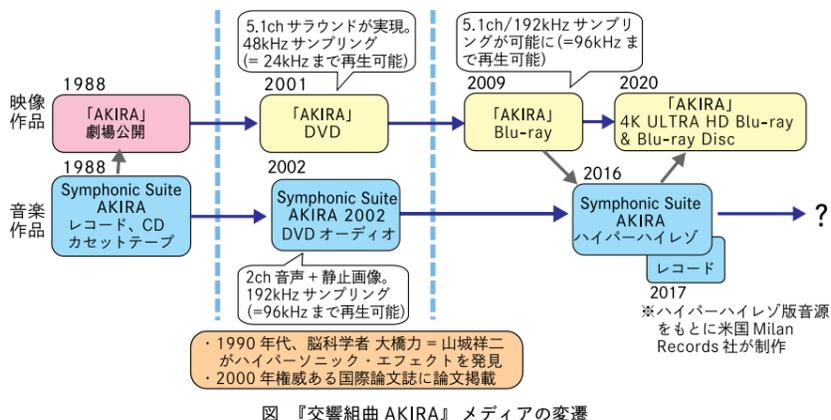
があつて。で、合唱でもフツの合唱じゃつまらないんで。……たまたま山城さんの曲をきいて、ああこれはいいなど……音楽と現実の音とのさかい目のないようなレンジの広い音楽を、山城さんがやっていて」（ヤングマガジン編集部、『AKIRA』公開記念特典ポスター集から）と語っています。このことを大友監督から直接聞いた山城は、敬愛する大友監督の記念碑的な作品において、音楽だけが別目的のために創られたものの流用であるなど許されないと、腹を括って作曲を受諾したといえます。実績のない山城に『AKIRA』の音楽を託した大友監督の直観と大胆さには、驚くしかありません。

アニメ映画『AKIRA』は、日本で一般的なアフターレコーディング——動画を先につくり、それに合わせてセリフなど音声録音する（方式をとらず、海外のアニメ制作でよく使われるプレスコ（プレスコアリング）——まず音声録音し、それに合わせて映像をつくる）方式で制作されました。音楽についても、大友監督が示した（祭りとレクイエム）というコンセプトや絵コンテを参考にしつ

スピルバーグは音楽を絶賛し、さらにルーカスはその後手がけた『スターウォーズ』新三部作の音楽で声を全面的に使うようになったことに、そのインパクトの大きさが伺えます。山城は映画音楽に関してまったくの（素人）から始まり、大友監督の世界観との邂逅を通じて極めて斬新な音世界を創造し、世界の映画シーンに大きな一石を投じたといえます。

## メディアの変遷からみる『交響組曲 AKIRA』

『交響組曲 AKIRA』は、一九八八年の発表以来、メディアの進化に合わせて音の創り直しを重ねている珍しい作品といえます（図）。それは組頭・山城祥二（＝脳科学者・大橋力）が発見したハイパーソニック・エフェクト（耳には聴こえない超高周波を含む音が深部基幹脳を活性化し、心身ともに瑞々しくする生理現象）<sup>\*文献</sup>の発現を既存のメディアでいかに実現するかという挑戦であると同時に、「人間本来の音環境」の追求でもありました。そもそも劇場公開の時点から、音楽作品としての『AKIRA』は、山城



CD『交響組曲 AKIRA』

つ、アニメーションの作画よりも先行して、数ヶ月という厳しい制作期間での作品創りが求められました。創った音楽が、作品のどこどのように使われるかは、作曲する時点ではわかりません。そこで、映画音楽の経験が皆無な山城が、先行事例を調べつつ手探りで開発したのが、（サウンド・モジュール方式）という独自の作曲方式でした。この方式ではまず、テンポやピッチ、音律や音階といった音楽の（規格）をいくつかの系統に体系化し、同一系統内では共通性をもたせました。次に、同一系統内の（音のモジュール）（メロディ、ハーモニー、リズムパターン等の要素や、それらをいくつか組み合わせる小さなシステム）を、それぞれ独立して扱えるだけでなく、互いに音楽的に共存可能なように創ることにしたのです。それによって、『交響組曲 AKIRA』を構成する別々の楽曲から抜き出した音と同じシーンで使っても、矛盾なく調和させることが可能になりました。

山城は初期のMacintoshコンピュータとシンセサイザーを使って、楽曲をまず電子音楽として作曲し、そのデモテープによってメンバーに楽曲の

にとって決して満足できるものではないかもしれませんが、まず、当時主流となっていたCDは、人間の可聴帯域の周波数しか記録・再生できないメディアです。また、当時の映画館のスピーカーシステムは、当時の映画館のスピーカーではなく、映画館での「AKIRA」の試写の際、山城が怒りだしてしまっているのではないかとハラハラしていた関係者もいたほど、レコーディングスタジオで実現していた音とは異質なサウンドしか再生できていませんでした。しかし、それが当時の映画館の限界であり、その解決が困難であることは山城も承知していました。山城は早い時期から、個人が自宅で鑑賞する「AKIRA」つまりホームシアターで実現できる音に心を寄せていきました。

30年以上にわたる「AKIRA」のメディア変遷のなかでひとつのエポックとなったのは、DVDの登場による5.1チャンネルサラウンドです。それまではステレオが当たり前で、前からは聴こえてこなかった音が、スピーカーの増設により「後ろからも聴こえる」体験が実現可能になったのです。人類の遺伝子がはぐくまれた熱帯雨林環境では、〈音〉は前方からだけでは

れるほど変わります。DVDとBlu-rayならばBlu-ray、Blu-rayよりもさらに凄いのには4K ULTRA HD Blu-ray。なんと4K UHDでは可聴域の響きが驚異的に変わったことにお気づきの方も多いことでしょう。つまり、一般的な環境で聴くことのできる『交響組曲 AKIRA』は、いまだに完成形ではないといえます。作曲家山城祥二にとっての「AKIRA」の完成形とは、「2chステレオで正面だけから聴こえてくる可聴域だけの音ではなく、サラウンドで360度から音がきて、ハイパーソニックを豊かに含んでいる」ものであり、それが実現しない限り「AKIRA」に完結は訪れないでしょう。さながらカタルーニャの建築家アントニ・ガウディの〈サグラダ・ファミリア〉(バルセロナの教会堂)のようないつ完成に至るのかわからない展開が、『交響組曲 AKIRA』を、いつそう唯一無二の作品にしているのかもしれない。

今回の〈逢燦杰極〉では、「ハイパーソニック・サウンド」であり、かつサラウンドである」という、山城がめざす音環境にかなり近い状態が実現します。楽器群は正面の舞台上にあると

はなく全方位360度から、さらには上からも下からも響いてきます。その環境音には人間の耳には聞こえない広帯域の周波数が含まれ、それがハイパーソニック・エフェクトを発現させます。そうした環境が人類にとってのスタンダードな音空間だとしたら、「AKIRA」もそうあってほしいと、山城は考えたのです。

実は、そうした360度の音場を2チャンネルで表現するために、ダミーヘッド・マイクホンという人の頭の形をしたユニークなマイクが、『交響組曲 AKIRA』の〈ぬいぐるみのポリフォニー〉などで使われています。耳の部分にマイクが仕込まれていて、これを使って巧妙に収録・編集された音は、まるで実際に後ろや斜めに音源があるような、生々しい距離感と抜群の臨場感を生みます。山城がこのマイクを好んで使うのも、本来の音環境を求めるがゆえのこだわりのひとつです。

サラウンドシステムの登場は、『交響組曲 AKIRA』にとって画期的な出来事であった一方、チャンネル数は増えてもDVDに記録可能な周波数上限は24キロヘルツまでにとどまってお

はいえ、ホールの豊かな反射音によって全身で音を浴びることができるとす。ぜひ人間本来の音環境に近いこのハイパーソニック・サウンドをお楽しみください  
\*文献 大橋 カ「ハイパーソニック・エフェクト」  
岩波書店(2017) (宮部史)

〈逢燦杰極〉の誕生  
〈逢燦杰極〉は、「AKIRA」のサウンドトラックの再現ではありませ

ん。〈なかのZERO大ホール〉というコンサートホールに合わせて構築された新たなライブ作品です。その作品創りにおいて、ジェゴグについて長年積み上げてきたハードウェア・ソフトウェアに及ぶ刷新が決定的な役割を果たしてきたことは、他のページで述べたとおりです。ここでは、〈逢燦杰極〉をさらに深くお楽しみいただくために、その誕生に重要な役割を果たした音響的な要素を三つご紹介いたします。

その第一はホールの選定です。バリ島のジェゴグは本来屋外で演奏され、その響きは湿り気を帯びた大気と大地を伝わって眼前の聴衆に伝わりま

り、この段階ではまだハイパーソニック・エフェクトの発現は困難でした。こうした状況を打破したのが、可聴域上限を超える高周波が脳深部の血流を増大させ心身の状態を改善するとともに音への感動を深めるといふ山城大橋の脳科学研究と、それによって先導された〈ハイレゾリユーシジョン・オーディオ〉の開発です。そうした研究成果を誰もが体感できるコンテンツをめざし、ハイパーソニック・サウンドを追求するための挑戦が、DVDオーディオ(2チャンネル、96キロヘルツまで記録再生可能)による『交響組曲 AKIRA 2002』Blu-ray (5ch・96キロヘルツまで)、ハイパーハイレゾ『交響組曲 AKIRA 2016』4K ULTRA HD Blu-rayへとつながっていきます。

究極のサウンド“ハイパーハイレゾ”コンテンツ好評配信中!

ハイレゾ配信サイトで絶賛発売中!

人間には聴こえない超高周波音が音の魅力をいや増し、心身を健康にする脅威の生理現象〈ハイパーソニック・エフェクト〉。発見者である芸能山城組頭 山城祥二＝脳科学者 大橋力が自ら制作した“ハイパーハイレゾ”コンテンツがDSD11.2MHzの超高音質も含めて絶賛配信中。2016年に発売された「交響組曲 AKIRA 2016 ハイパーハイレゾエディション」の配信も大ヒットを記録。究極の美しさ、快さ、そして感動に溢れた驚異のハイパーソニック・サウンドを是非、体験して頂きたい。

「Symphonic Suite AKIRA 2016 ハイパーハイレゾエディション (交響組曲AKIRA2016)」/芸能山城組  
[アルバム(10曲入り)]  
WAV/FLAC(192kHz/24bit):3,740円(税込)  
DSD5.6MHz:4,290円(税込)  
DSD11.2MHz:5,390円(税込)  
[単曲]  
WAV/FLAC(192kHz/24bit):660円(税込)  
DSD5.6MHz:770円(税込)  
DSD11.2MHz:880円(税込)

Symphonic Suite AKIRA (輸入盤アナログレコード)、ビクターオンラインストアにて発売中!  
<https://victor-store.jp/>  
VICTOR ENTERTAINMENT

『AKIRA』の音 不朽のアニメ映画を彩る未知のサウンド 日本科学未来館で公開中

会期：常設展(2022年2月末まで公開予定)  
開館時間：10:00～17:00  
休館日：火曜、年末年始(12月28日～1月1日)  
入館料：一般630円、18歳以下210円、6歳以下の未就学児無料  
会場：日本科学未来館 3階常設展 零壹庵  
※常設展の入場には事前予約が必要です。開館に関する最新情報は日本科学未来館のホームページでご確認ください。

- 日本科学未来館では映画『AKIRA』の音をテーマとした常設展が公開中だ。作曲家山城祥二独自の制作手法とフィールドワークで収集した民族音楽を基に生まれた『AKIRA』の音(セリフ・音楽・効果音)を、制作背景から読み解く展示となっている。
- 本展示では3面にプロジェクターで投影された没入感のある映像が体験できる。映像前半では山城祥二のフィールドワークをたどり、本公演でも紹介されるインドネシアの楽器ジェゴグのほか、ガムラン、僧侶たちによる声明など『AKIRA』の音の源流を世界地図と共に紹介。後半は『AKIRA』アニメーションシーンから山城自身が選んだ「音の名シーン」が上映される。本編上映後には、『交響組曲 AKIRA』の楽曲を楽しむこともできる。
- 展示会場には山城自らが設計した6台のスピーカーが設置され、192kHz/24bitのハイレゾクオリティで6.1chサラウンド環境を体感できる。『AKIRA』ファンにとっては「音」から映画を見直す面白さがあり、初めて映画に触れる人々には迫力のある音空間と『AKIRA』独特の世界観が好評だ。映像作家には数々のMVを手掛ける堀田英仁を、アートディレクションには安田昂弘を迎え、『AKIRA』という作品へのリスペクトに溢れる展示となっている。

Miraikan 20th

す。ジェゴグの響きは、私たちが日ごろ耳にする機会の多い近現代の西洋音楽や日本伝統音楽の音響構造とは大いに異なります。そのため、現代の音楽に合わせて音響設計がなされているわが国のコンサートホールとの相性は、残念ながら良くはありません。これまで芸能山城組は、音響の良さで知られるいくつものホールでジェゴグを演奏してきました。しかし納得のいく響きが得られるホールにはこれまで巡り合うことができず、舞台上のジェゴグの生きた超重低打撃音をどう響かせて客席に届けるかは、長年の課題になっていました。

〈逢燦杰極譚〉で使用する〈なかのZERO大ホール〉は、芸能山城組の代表的演目「群芸『鳴神』」を上演するために何十回も使用してきたホールで、クラシック音楽から能狂言まで幅広いジャンルに対応しています。ただし、「群芸『鳴神』」ではアコースティックな音よりも電子楽器など人工的な音が強調され、照明や吊り物などを使う大がかりな演出のため、ホールに備え付けられた反響板を使う機会はこれまでありませんでした。そこで今回、山城のアイディアで、普

てこのコンボ・オルガンで、刷新された〈未来〉を演奏します。

音色も従来の「AKIRA」のチャイロオルガンからアップグレードし、このNORDのパイオルガンの音色を編集して、よりレクイエムに相性のよいサウンドが創りだされました。丹念な音創りと並行して様々なエフェクターたちとの掛け合わせ実験も行ったところ、Lexicon製の480Lデジタル・リバーブとの相性が特によいことが見いだされ、パイオルガンとしてのリアリティも非常に高まっています。ペダルキーボードから鳴らされる低音の迫力も増し、より包み込まれるような感覚をもたらす深みをもった〈未来〉を描くサウンドに生まれ変わったことを体感していただければ幸いです。

この三つの要素が加わって、劇伴としての『交響組曲 AKIRA』から飛翔し、山城流の新たな〈逢燦杰極〉が生まれました。山城祥二の描く、今まで聴いたことのない新しい「逢燦」と「杰極」の織りなす世界に身を委ねて、楽しんで頂ければ幸いです。

(高木敦史)

段は使用しない反響板を降ろし、どのようなジェゴグの響きが得られるかの実験を行いました。

その結果は驚くべきものでした。ジェゴグの生音に反響板からの豊かな反射音加わり、より繊細、強靱、重厚でしかも生命力にあふれる響きが客席に届くことがわかったのです。これが、新しい〈逢燦杰極〉の音が創発した瞬間でした。このきわめて特異的なホール音響が加わったことにより、PA(音響機器)による電子的な音の処理抜きでも充実した響きが得られ、コンサートホールならではのライブ作品が実現することになりました。さらに、このホールが備えている音響可変幕によって、楽曲ごとに適したホールの響きの調整をすることも可能になりました。

第二は、〈なかのZERO大ホール〉の壁面に設置されたスピーカーステムです。〈なかのZERO大ホール〉では先年の大規模改修工事で音響設備を一新し、壁面スピーカーにフランスの音響機器メーカーNEXO社のGEO S12シリーズが採用されました。NEXO社のスピーカーは、鳴りのよさに加えて、音の再現能力、忠

実度が高く、パワーがありながらクラシックのような繊細な音の再生も得意であるという稀有な二面性を持ちます。〈逢燦杰極〉では、ジェゴグ、人間の声、各種の鳴り物、シンセサイザー、電子ドラムなど、アコースティックな音と電子楽器とが共存します。どちらの良さも活かさなければならぬこの作品に対して、NEXO

スピーカーシステムのもつこの特徴が絶妙に作用し、生音と電子音とが区別できない非常に高い効果を導きました。

第三は「未来(レクイエム)」で活躍するパイオルガン・シンセサイザーの選定です。

作曲家・山城がクラシック音楽や指揮法に通暁していることは、あまり知られていないかもしれませんが、山城は、東北大学在学中に、現代指揮法を確立したことで世界的に知られる齋藤秀雄(小澤征爾の師)の一番弟子ともいえる指揮練習用ピアノストだった作曲家・福井文彦教授に指揮法の個人指導を受け、斎藤メソッドといわれるその指揮法を習得しました。そして様々なアマチュア合唱団の指揮者として活動したのち、芸能

### 〈逢燦杰極〉と COVID-19

〈逢燦杰極譚〉公演の準備は、COVID-19との闘いでもありました。合唱やジェゴグの稽古は典型的な「密集」「密接」となり、防音のためには稽古場を「密閉」しなければなりません。そこで医師を含む対策チームをつくり、一人の感染者も出さずに公演を実現し、お客様に安全に楽しんでいただくにはどうしたらよいか、知恵を絞りました。

まず、直径32cmの太いダクトを具え10分で稽古場の空気の入替えができる強力な換気装置3台を自ら設置しました。稽古中は定期的に換気を行うとともに、二酸化炭素濃度を指標として随時、稽古を中断して退出・換気を行います。楽器や人の間に飛沫防止シートを張り巡らせ、稽古中の不織布マスク常時着用も徹底しました。楽器の稽古は日時を分散化した(個別稽古)、(少人数稽古)から始め、交代ごとに徹底した消毒を行いました。合唱の稽古場は広くて通気性のよい外部施設とし、二酸化炭素濃度を指標に換気を行います。

次の段階では、複数の稽古空間を結ぶ(リモート合わせ稽古)とし、打ち合わせ等もオンラインに切り替えました。メンバーは毎朝、アプリを使って検温結果と健康状態を報告し、稽古参加前には発熱がないことを確認・記録した上で、当初は2週間に1回、公演2週間前からは毎週PCR検査または抗原検査を続けました。舞台の空間構成や演出も、感染防止の観点から当初計画に大幅な変更を加えています。

そして5月初旬、広いホールを借り飛沫防止シートを張り巡らして、ほぼ1年半ぶりに全員が同じ空間に顔を揃えた(リハーサル)を行いました。その演奏で味わった感動と充実感は今まで体験したことのないほど深く、(ともに歌い奏で楽しむ)ことが人間にとっていかに必須の情報行動であるかを改めて認識する機会となりました。現代文明と自然界との関わりや負の遺産ともいえるこのパンデミックは、図らずも人類にとっての〈群れ〉と〈芸能〉の本来の価値を教えてくれました。



地下の稽古場から排気するダクト



換気ダクトを稼働させながらのジェゴグの稽古

山城祥二こと大橋力

プログラムされた自己解体

「……かくして彼は、その生をまっとうした」という表現が、見事な生涯を貫き大往生を遂げた人に贈る日本語として存ります。この言葉は、生命の最後のひとこまとして死が存在することを意味します。それは、死は生命現象の一部なのだ、と読み解く思いが日本人の魂の基層に流れていることを教えるものです。このことに心を打たれた私は、生と死にかかわるひとつの仮説を立てました。

すくなくからぬ地球生命が、その生存増殖のために環境から取り込んだ物質と空間とを、他の生命に再利用しやすい状態から環境に返還する自律的な自己の解体を、「死」というかたちで実行している——とする、「プログラムされた自己解体モデル」(図1)です。これを「科学基礎論学会誌」で発表しました。アニメ映画『AKIRA』の音楽を創る直前の一九八七年のことです。地球のような有限の自然生態系では、この自己解体によって、生命活動によって奪われた物質と空間とが再利用しやすい状態で返還されて環境は元

もとの状態をとり戻し(原状回復)、生命たちは次世代を増殖(自己複製)させて進化することが可能になります。これにともなう導かれる増殖の加速は、進化を迅速化することを可能にします。なお、この自己解体現象は、二〇〇九年、単細胞真核生命テトラヒメナを使った細胞分子生物学実験で、私たち自身の手によって、その実在が証明されました(写真1)。

実際の地球でも、このタイプの生命の一群(「真核生命」)の進化の頂点に立つホモ・サピエンスは、特異的に発達した脳機能を活かして、「文明」と呼ばれるライフスタイルを築きあげています。しかし、自律的死を獲得するまでに進化していない地球の持つもうひとつの生命、「原核生命」の系譜は、生物現存量では「真核生命」を数倍から数十倍うわまわるといわれながら、自己解体という進化の迅速化手段を獲得できていないその実体は、今なお単細胞までの進化に止まっています(図2)。私たち「真核生命」として、「プログラムされた自己解体」という名の自律的死のメカニズムの価値は、量り知れません。

転じたのちも、縄文がその遺伝子を保持したまま基層をとり、世界国家(漢)の一端・弥生が表層をかたちづくります(図3)。これは、リン・マーギュリスが提唱した、非ダーウィニズム的な「共生進化」と、ほとんど同一です(図4)。「交響組曲AKIRA」のフィナーレとなる「未来(レクイエム)」で、私はこ

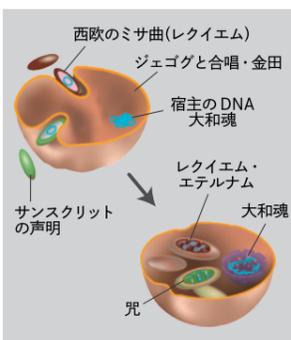


図5—(共生進化)の創った(未来(レクイエム))

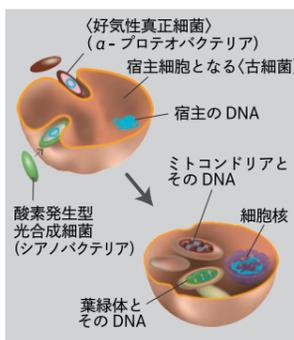


図4—マーギュリス的(共生進化)のメカニズム(大橋力:科学, 91(3), 222, 2021)

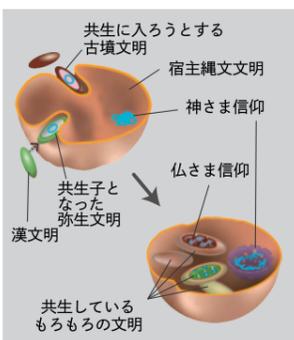


図3—あらゆる文明と共生して(縄文)という(共生脳機能体系)(大橋力:科学, 91(3), 222, 2021)

知の共生

アニメ映画AKIRAは、それを締めくくると鉄雄の死をはじめ、全編に死が横溢しています。それらをプログラムされた自己解体として読み解くとき、それを基にして生まれ出るであろう新たな生命たちの未来が輝きます。

歴史学者アーノルト・トインビーは、「世界国家が成立すれば、たとえほんの

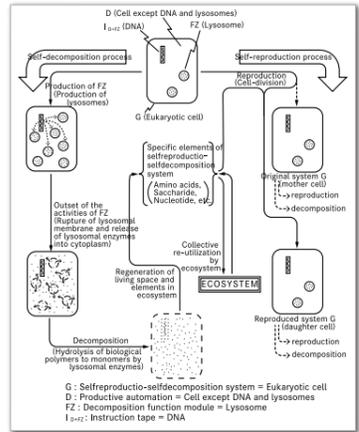


図1 プログラムされた自己解体(大橋力・他:科学基礎論研究,18(2),21,1987)

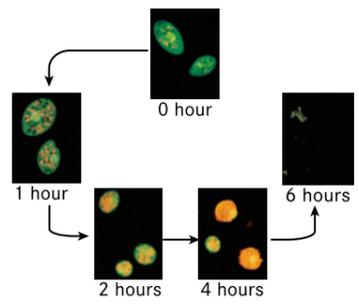


写真1 テトラヒメナの自己解体(T.Oohashi, et al.: Artificial Life, 15, 20, 2009から)

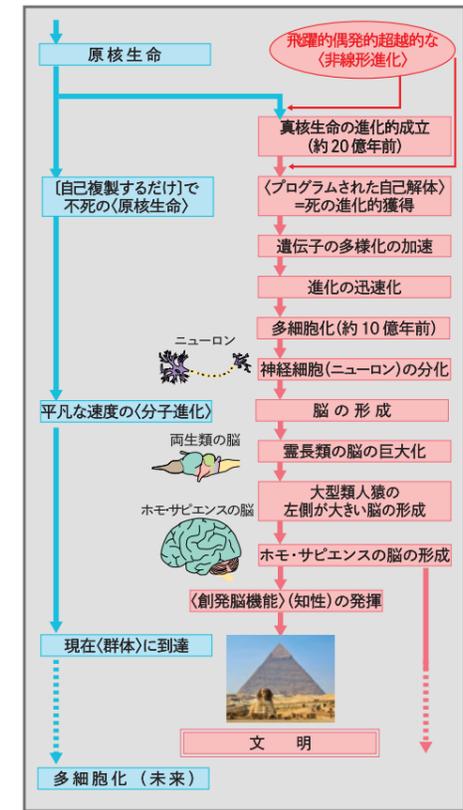


図2 生命現象として捉えた(文明発現)までの歩み(大橋力:科学, 90(1), 34, 2020から)

ちなみに、西欧音楽に民族文化の血を取り入れようとした(国民楽派)などでは、民族の音楽の文法を西欧音楽の文法に合わせて切り取り、西欧音楽に変質させて統一することによって、この目的を達していました。

私の考えた「サウンド・モジュール方式」では、こうした変質・統一を狙わず、互いに異なる音楽表現を共存可能にする「鍵」を探し出して音世界の新しい秩序と共存とを創り出します。「逢燦(アキラ)の(未来(レクイエム))」は、その極みともいえる姿を踏んでいます。ここでは、バリ島のジェゴグ、西欧のミサ曲とパイプオルガン、サンスクリットの呪文、現代社会に根付いたポピュラー音楽などが、協調する状態で共生しています。この「音世界の共生」こそ、AKIRAの音楽のもうひとつの基層をなすものです。

この絶妙な効果をもつ「共生」というコンセプトを、ホモ・サピエンスの文化やライフスタイルに拡張することはできないでしょうか。ダーウィニズムの淘汰理論に良く調和するトインビーの指摘した原則は、文明史の通則となってきました。しかし先に述べたように、古代日本列島では、当初、大陸起源の弥生文明に置換されたかに観えたものが、列島本土を東漸するにつれて、「や

まとだましからざる」(和魂漢才)という「知的共生」と呼べるような状況を実現していたのです。この脳機能体系は日本列島人の魂の基層を早期に形成するとともに強固に持続し、明治に至って「和魂漢才」という言葉を生み出しています。このことは、私たち日本列島人が、トインビー的あるいはダーウィニズム的な「淘汰による進化」の支配下に存在せず、マーギュリスの共生進化を固有に保持していることを告げます。

今日の地球社会を破局に導いている元凶が、シュメール・ヘレニック系のダーウィンの単個体オリエンテッドの世界像に発することは否定できません。こうした文明の禍いを無力化するうえで、マーギュリス的、あるいは縄文的な「知の共生」の宿している可能性は量り知れません。「知の共生」には自覚ましい歴史の実績があります。近代にいたるまで西欧で「真理」だった「万物は神が創り給うた」とする「創造説」は、新しく現れたダーウィンの「進化論」との知の共生を通じて無力化され、「真理の座」を喪って「物語」に近づいています。「政争」も「戦争」も經由しない人の世の組換えであり、「知の共生」の威力を示すものです。(了)

\*文献 アーノルド・トインビー、「図説 歴史の研究1」, 桑原武夫他訳, 学習研究社(1970)

# 『利他の惑星・地球』の引力

本田 学

音楽家・山城祥二は、科学者・大橋力として〈ハイパーソニック・エフェクト〉を発見し、ハイレゾ・オーディオ開発の引き金を引いたことは広く知られています。しかしその大橋が、岩波書店の硬骨の雑誌「科学」に『利他の惑星・地球』を連載していることをご存じの方は多くないかもしれません。ここでは、その一端をご紹介します。

近年、文明を考える書物が再び話題となつています。中でも、冴え渡る論旨により世界中の人々を熱狂させた驚異の文明論が、歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリによる文明論三部作『サピエンス全史』、『ホモ・デウス』、『21 Lessons』21世紀の人類のための21の思考』です。このハラリ三部作をいくつかの点で超えてしまっているかもしれないとして、地球の未来に責任を感じる人たちの間で、静かに熱い注目を集めているのが『利他の惑星・地球』なのです。

この連載の中で筆者・大橋は、生

命の誕生、進化から未来までを生命科学と情報科学の射程に捉えつつ、宇宙の時間軸というマクロな視点から地球文明を生命進化の到達点として捉え直しています。その認識を土台として、現在、地球が直面している存続の危機が、ある種異形の文明の宿病に由来していることを明らかにしています。そのうえで、この危機を乗り越える可能性を、人類発祥の地アフリカの熱帯雨林に棲む狩猟採集民や、有史以前の日本列島に栄えた縄文文明などに探り、我々が取るべき道は確かにあるということ、指し示しているのです。

筆者の〈地球〉への着目は一九七四年。創流一周年記念芸能山城組第一回全国大会における組頭記念講演「もっとも貴いもの」を準備するなかで、「人類が実効をもつて制御する一番上位のシステムの階層」として〈地球〉を位置づけました。じつにハラリが生まれる2年前のことです。以来、半世紀

ログラムされた自己解体」という名の自律的死の概念は、類い稀なオリジナリティーとインパクトを持っていると言えます。定説の見直し、モデルの構築、人工生命を用いたシミュレーション、細胞生物学実験による実在検証など、壮大な研究体系の上に〈死〉の有効性や価値が論じられています。そして、地球生命の進化による〈死〉の獲得こそが、宇宙の中で文明の華を開かせた奇蹟の星・地球を生み出した可能性を鮮やかに描き出しているのです。〈死〉の有効性や価値を概念操作や思索の産物として主張するのではなく、冷厳な実験科学から導かれる所見として、高度な客観性の元に論じている例を、この筆者の他に見いだすことができません。この主題に関する限り、ハラリの三部作に対する『利他の惑星・地球』の優越は圧倒的かもしれません。

### 3. 人類が今なすべきこと

ハラリは三部作最後の『21 Lessons』で、人類は今、いかになすべきかを主題に幅広く論じ、最後に〈瞑想〉に着地し、壮大な三部作を結んでいます。ハラリのいう〈瞑想〉は、

個人を中心に置いた世界像では、その心をゆるぎないものとする最善の選択になりうるかもしれない。しかしそれは、いま崩壊に瀕している地球社会をいかにほど立ち直らせることができるでしょうか。いかにも歴史家らしく難題を饒舌に描きだし不快感を喚起する表現も辞さずに危機感を煽った拳句、その解決を個人の内面に探る〈瞑想〉に求める展開には、驚き落胆した読者も少なくないはず。ここに三部作の限界を見ないわけにはいきません。

それに対して『利他の惑星・地球』では、筆者が〈縄文文明〉の研究過程で見出した「互いに異なる文化という脳機能体系の共生」に注目し創発した〈知の共生〉が、現地球社会の病理に対する処方として示されます。そして〈知の共生〉により、主体を個人に置きながら、なんら犠牲を生むことなく世界を実質的に変革する作戦を可能にすることが、自然科学者ならではの抑制された筆致で淡々と示されています。ハラリの、「引きこもり」に転じかねないスタンス〈瞑想〉に比べ、『利他の惑星』の攻めのスタンスは、したたかな上に、希望の灯をと

近く自然科学による実証実験を踏まえて進化してきた精髓がこの連載に凝縮されています。これを可能にしたのは、科学と芸術、自然科学と人文科学の壁を超えた山城こと大橋の脳活性の賜物であり、哲学と文明論から踏み出すことのないハラリの活性とは、別次元にあると思われるのです。ではいったい、どのような視点が特異かつ傑出しているのか。ハラリの偉大なる三部作と『利他の惑星・地球』とを対比しつつ、ご紹介しましょう。

### 1. 概念道具の開発

ハラリの三部作を通底するキーコンセプトとして彼が開発した概念道具、それは〈認知革命〉とそれを可能にした〈虚構の共有〉です。これらの能力を具えたホモ・サピエンスたちの壮大なこれまでの歩みと未来とを、「歴史の文脈」という演出で上演して見せ、世界を熱狂させました。一方、これらの概念道具が歴史の用語として創られたことにより、理論の科学的正当性を保証する〈反証可能性〉と無縁になってしまったことは指摘しておかなければなりません。

一方、『利他の惑星・地球』の中では、

もしてくれま

芸能山城組の若手組員の一人は、『利他の惑星・地球』に次のような感想を寄せました。

本書はあくまでも「書かれたもの」であるのだが、著者はその限界を科学者として鍛え抜いた自然科学的なマインド（理）と芸術家として育んだ詩的なセンス（感性）の結合によって突破することに成功しているのではないだろうか。

本日、山城祥二の音楽を堪能された皆さまが、その音に耳を傾けたように、大橋力の『利他の惑星・地球』をひもとき、地球の未来に向けて一歩を踏み出す仲間に加わってくださることを願ってやみません。



〈認知革命〉〈虚構の共有〉を凌駕するかもしれないスケールをもつ概念道具〈本来〉が開発されています。その骨子は、「何の適応も行うことなく自己保存・自己複製が成立している状態」つまりある生命が適応不要であることを含意する概念です。筆者は、「特定生命種と特定環境との特異的かつ全面的な適合状態」を、「そのまま何もつけ加えず何も差し引かない状態」で生命を完全に成り立たせることのできるデフォルト・フェイズと位置づけ、これに対して〈本来〉という呼称を与えました。〈適応〉だけに固執し、その対義語として〈不適応〉しか生み出せなかった現代生物学を根底から揺るがし、その書き換えを迫るインパクトを宿している概念道具だといえます。

### 2. 〈死〉という主題

ハラリは、『ホモ・デウス』冒頭で、〈死〉、〈不死〉、〈非死〉について論じています。それは、医学の最前線にぬかりなく目配りした充実した内容を構成し、現状への憂慮が凝縮されている一方、死という現象それ自体についての言及がありません。これに対して、『利他の惑星・地球』で示された〈ブ

## 大橋 力 著 連載 利他の惑星・地球

### 岩波「科学」で絶賛連載中

【生命編】 2019年4月号～2020年1月号

【文明編】 2020年2月号～2021年3月号

【追創編】 2021年6月号～(年4回掲載中)

\*バックナンバーのお求めは岩波書店公式サイトへ

<https://www.iwanami.co.jp/kagaku/>

- 【生命編】
- 第1回 新たな「世界像」をもとめて
- 第2回 (プログラムされた自己解体モデル)の真髄
- 第3回 (自己解体)という進化戦略
- 第4回 (死)の起源
- 第5回 (プログラムされた自己解体)は仮想か実在か[1]
- 第6回 (プログラムされた自己解体)は仮想か実在か[2]
- 第7回 (利己)の惑星・地球 礼讃の射程
- 第8回 (利他の惑星・地球)を唱えることはもはや絶望か
- 第9回 (共生進化)は(利己)を再起動するか
- 第10回 (超越的奇蹟の惑星・地球)その利他の精髓そしてその危機



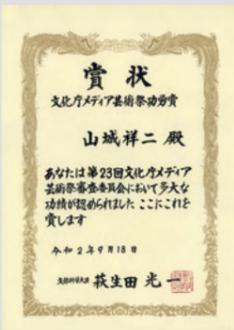
- 【文明編】
- 第11回 生命科学で文明を捉えうるか
- 第12回 新しい概念道具たちを整備する[その1]
- 第13回 新しい概念道具たちを整備する[その2]
- 第14回 近現代を超える合理文明の先駆 (シュメール) (ハイ島文明)の駆動系は (シュメール文明)とまったく位相を異にする
- 第15回 ライフスタイルの位相差から (文明の痕根)を掘り起こし (非圧解)を探る
- 第16回 (群内個体協同脳機能)の実像の驚異
- 第17回 (縄文文明)と(弥生文明)を土器テクスチャーのフラクタル次元で対比する
- 第18回  $\alpha$ -EFGポテンシャルが芽生え出した縄文土器と弥生土器による報酬明瞭活性化の対比
- 第19回 ライフスタイルと文明の脳機能のスペクトルを俯瞰する
- 第20回 文明は(死)と(共生)によって創り育てられた
- 第21回 私の中の縄文と弥生。その今日的意義
- 第22回 日本人の中の縄文と弥生。その文明史的意義
- 第23回 奇蹟の連鎖・奇蹟の累積
- 【追創編】
- 第24回 もっとも貴いもの
- 第25回

# はんじょうき 山城組繁盛記

「向かい風の曠野をゆく山城組」と言われた草創期から四十年余。実験集団の試みは音楽芸能から多方面へと拡がり、力強い開花をみせています。

連載「利他の惑星・地球」についての詳細は24頁、日本科学未来館展示について詳しくは19頁をご参照ください。

## 組頭山城祥二が 第23回文化庁メディア芸術祭功労賞を受賞



山城祥二に、2020年9月18日、日本のメディア芸術に大きく貢献したとして第23回文化庁メディア芸術祭の功労賞が贈呈されました。

山城は、アニメ映画「AKIRA」の音楽で国内外に衝撃を与えたアーティストであるとともに、学際的な科学者・大橋として〈ハイパーソニック・エフェクト〉を発見・実証し、ハイレゾ音楽規格成立の礎を築きました。こうした芸術と科学の垣根を超えたマルチモーダルな業績による、世界のメディア芸術史への先駆的な役割が評価されたものです。



## あらたなパラダイムを拓く 『ハイパーソニック・エフェクト』



音としては聴こえない超高周波を含み複雑なゆらぎをもったサウンドに包まれたとき、心と体が瑞々しくなる驚異的生命現象〈ハイパーソニック・エフェクト〉。この類いなき現象の発見者でもある大橋力（組頭山城祥二）が、研究の端緒から現在最先端の応用までを網羅し、一般の読者にもわかりやすく解説した著書『ハイパーソニック・エフェクト』です。2017年に岩波書店から刊行され、大きな反響を呼び続けています。

- 誰をも驚かす音のもつ本質、学会の常識を乗り越えた膨大な成果に驚嘆——長尾真（元京都大学総長、元国立国会図書館館長）
- 科学者と芸術家、二つの魂が一人の人間の中に共存するという奇跡。現代の「古典」の誕生。——茂木健一郎（脳科学者）
- この「発見」がなければ、ハイレゾオーディオは今、存在しなかった——麻倉伶士（オーディオ・ビジュアル評論家）
- 実験の精緻さと発想の独創—若き研究者たちに檄する書——鈴木陽一（元日本音響学会会長、東北大学教授）

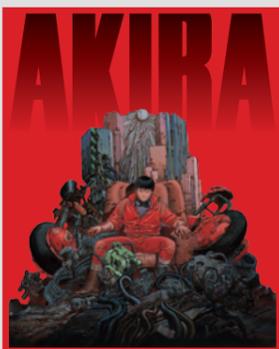
## 〈利他的遺伝子の優越〉が国際学会のベスト論文賞！



1980年代に大橋力により創始され山城組文明科学研究所を拠点に展開している〈プログラムされた自己解体とその利他的作用〉の研究。その成果をまとめた論文が人工生命の二大国際学会のひとつECAL（European Conference on Artificial Life）の二十周年記念大会（2011年、フランス・パリ）に採択されました。「死すためのプログラムの進化的獲得（Evolutionary acquisition of genetic program for death）」という挑戦的な内容の論文は、人工生命の原点に立ち返ることをテーマにしたこの大会で、わずか10名のベスト論文賞に選ばれました。その後、この分野で最大の学術誌『Artificial Life』にも掲載され、2018年12月には、アイルランドでの国際会議で、さらに新しく見出された知見を加えた発表が行われました。

プログラム編集：チーフ大須理英子、サブチーフ村上一郎、阿部江李子、大出夏子／冊子構成：山崎公子、デザイン：大村六花

## また進化の頂点に立った『AKIRA』4Kリマスター



2020年4月、『AKIRA 4Kリマスターセット』が、バンダイナムコアーツから発売されました。「4K ULTRA HD Blu-ray」では、4K高画質化とあわせ、音声面では、山城祥二のもと、5.1chをリミックスした音源に192kHzサンプリングPCMのハイパーソニック・エフェクトを新たな“ペガサス”処理で加え、全面的に生まれ変わらせました。その凄まじりアリアリティの音世界には大きな反響が巻き起こっています。「いつ観ても何回観ても細胞レベルで震えるなー！「キレイ！音が素晴らしい！これに尽きます。AKIRAの世界がこんなに美しく堪能できたことに感謝です。」といった感動の声が相次いでいます。

誕生から30年以上を経て、DVD、Blu-rayとメディアごとに進化してきた『AKIRA』の音。その最終進化形とも言える4K UHD Blu-rayの音について、専門家からは、次のような評価が寄せられています。「メディアの変遷とともに、AKIRA 4Kリマスターセットは音の進化も体験できる素晴らしいコンテンツに仕上がっている。」（「麻倉伶士氏が選ぶA&Vベストテン」より）。「超ハイレゾの192kHz収録の5.1ch音声も凄まじい。〈音質100点〉」（「ハイクオリティ・4Kリマスター Best5 伊尾喜大祐が画質と音質で選んだ！」より）。

## 「交響組曲AKIRA」のLPレコードが米国で大反響



米国 MilanRecord 社副社長 Jean-Christophe Chamboredon 氏が自ら来日して熱望した「交響組曲 AKIRA」のLP化が実現。ハイパーハイレゾ版のデジタル音源（11.2MHzDSD）をもとに原盤をカットしたLP版『Symphonic Suite AKIRA』が2017年9月に発売されました。発売と同時に大反響を呼び、米国ビルボード・チャートのアナログ・レコード部門で第5位に輝き、さらに、権威あるピッチフォークのレビューでは、「日本映画史におけるもっとも重要な映画音楽のひとつ」という賛辞とともに、その月最高の8.4という高スコアで「ベストアルバム」に選ばれました。

## 日本プロ音楽録音賞ハイレゾ部門「審査員特別賞」受賞



大橋力（=組頭山城祥二）が、2015年12月4日、第22回日本プロ音楽録音賞ハイレゾリレーション部門「審査員特別賞」を受賞しました。

その受賞対象作品となったのは、11.2MHzDSD規格『超絶のスーパーガムラン ヤマサリ』の楽曲「ウジャン・マス」です。これは、インドネシア・バリ島で最高峰と讃えられるガムラングループ“ヤマサリ”の名演を、オリジナル開発した11.2MHzマルチトラックDSDレコーダーにより超高周波成分をもらさず大橋自ら現地録音し、編集・制作した作品です。

## マルチパフォーマンス・コミュニティ 芸能山城組

芸能山城組は、芸能集団である以前に、遺伝子DNAに約束された人類本来のライフスタイルを模索し検証しようとする実験集団であり、“行動する文明批判”の一拠点です。

そのあゆみは、1968年、前身の「ハトの会コーラス」によるブルガリア女声合唱の実現に始まります。続いてジョージアの男声合唱、バリ島の〈ケチャ〉などの上演に成功し、世界初のマルチミュージカルティを実現しつつ、1974年、山城祥二を組頭として芸能山城組を創立しました。アマチュアの立場を堅持しながら世界諸民族の80系統に及ぶパフォーマンスを上演してきた実績、そしてそれらを糧として展開する伝統と現代とを融合した創造活動は、世界に例を見ません。

しかし、これらのアクティビティは、西欧近現代に対する行動する文明批判の一側面にすぎません。伝統的共同体の叡智に学び、専門化、単機能化を排した地道で真摯な“群れ創り”“ひと創り”こそが、マルチパフォーマンス・コミュニティ芸能山城組の真骨頂です。

芸能山城組の文明批判の大きな特徴は、その対象とする西欧文明の最大の武器である科学技術を貪欲に摂取し、自家薬籠中のものとして、西欧近現代それ自体の攻略に活用するところにあります。教育者、ジャーナリスト、エンジニアそして学生と多彩なメンバーの中で、生命科学、脳科学、数理科学、心理学、情報工学などの諸分野で博士号をもつものが10数名を数えます。これらの強力な文明科学研究を率いているのも、組頭・山城祥二こと科学者・大橋力です。

時代を先取りする一連の創作活動も、そうした比類ない活性の具体的なあらわれのひとつといえ、芸能山城組が西欧近現代にむけて放つ文明批判の鮮烈なメッセージに他なりません。

新人募集

## 芸能山城組の活動をご一緒しませんか？

芸能山城組では、職業的演劇家・音楽家でないことをメンバーの唯一の資格とし、〔遺伝子本来性〕のパフォーマンスを創ってきました。〔演奏で楽しむ〕ことを愛するどなたにも、どこにもない歓びと驚きがいっぱいの音楽・芸能をご一緒いただくことができます。

また、研究活動などを一緒にやってみたい方、芸能山城組の祭り創りや群れ創りに参画してみたい方、他に例を見ない質の高い活動と仲間を求めている方々。私たちは、一緒に活動する仲間を募集しています。活動にはいろいろな参加方法がありますので、まずはお気軽にご連絡ください。

参加方法、お申込み、お問合せ：芸能山城組 公式サイト <https://www.yamashirogumi.jp> で検索  
メール [mail@yamashirogumi.jp](mailto:mail@yamashirogumi.jp) 電話 03-3366-4741



## ハイパーソニック・ハイレゾ音源 絶賛配信中!!

耳には聴こえない高周波音が音の魅力をいや増す〈ハイパーソニック・エフェクト〉。この現象の発見者大橋力が制作したハイパーソニック・ハイレゾ音源が配信され、究極の美しさ、快さそして感動に溢れたハイパーソニック・サウンドがぐっと身近になっています。

第一弾がリリースされた2014年の「年間ジャンル別TOP10」で「World,その他」の1位～4位を独占。2015年には3作品が11.2MHzDSDの超高音質版も含めて配信され、2016年待望の「交響組曲 AKIRA 2016」がリリースされました。

第一弾・第二弾は【e-onkyo music】から「交響組曲 AKIRA 2016」はさらに【mora】から好評配信中



『芸能山城組アルバム』「交響組曲 AKIRA 2016」  
『芸能山城組アルバム』「輪廻交響楽」  
『芸能山城組アルバム』「恐山／鋼之剣舞」  
『超絶のスーパーガムラン ヤマサリ』  
『チベット密教 極彩の響き』  
ブルガリアン・ポリフォニー（1）  
ハイパーソニック・オルゴール『トロイメライ』  
ハイパーソニック・オルゴール『卒業写真』

## 百年後も読み継がれる 古典—『音と文明』



大橋力著『音と文明—音の環境学とはじめ』が2013年、岩波書店創立百年に際して“編集者が選ぶ百年後も読み継がれる岩波の本”単行本編六冊に、寺島実郎、船橋洋一、後藤乾一、柄谷行人、キッシンジャーの各氏の著書とともに選ばれました。これは「2000年1月以降に発行された岩波の本のなかから、百年後も書棚に残るものを岩波書店の編集部が厳選」（岩波書店編集部）したもので、「今後増刷を重ねやがてロングセラーと称されるようになるはず」（同前）として選ばれたものです。

『音と文明』：音楽は地球を救う？パリ島に行ってガムランのシャワーづけになると、なぜ人は気持ちイイのか？現代都市の音環境はなぜ健康に悪いのか？音のある環境が人の脳に与える影響を音響工学から解説し、現代文明の行方に警鐘を鳴らした画期的労作。（岩波書店単行本編集部）

表紙イメージ写真：舞台撮影 河合徳枝、画像構成 大村六花

# 時代がようやく追いついた——

原作・脚本・監督

## 大友克洋

世界を揺るがした伝説的作品が4Kリマスターで再臨!



# 4K REMASTER SET

4K ULTRA HD Blu-ray & Blu-ray Disc

4.24 ON SALE ¥10,780 [Tax included]

特典ディスク(Blu-ray) AKIRA SOUND MAKING 2019 | AKIRA SOUND CLIP BY 芸能山城組 | エンドクレジット (1988年公開版) | 劇場特報・予告集 | 絵コンテ集 (静止画)

特製ブックレット 岩田光央×佐々木望×小山茉美×草尾毅×明田川進によるスペシャル座談会などを収録 | 特製スリーブ

4K ULTRA HD Blu-ray COLOR / 124min. / Japanese: DOLBY TrueHD (5.1ch 192kHz 24bit) - DOLBY DIGITAL (5.1ch) - LINEAR PCM (Dolby Surround) / English: DOLBY TrueHD (5.1ch) / 16:9 (2160p Ultra High Definition) / HEVC / 100G / 日英字幕 (ON-OFF可能) ※日英音声  
Blu-ray COLOR / 124min. / Japanese: DOLBY TrueHD (5.1ch 192kHz 24bit) - DOLBY DIGITAL (5.1ch) - LINEAR PCM (Dolby Surround) / English: DOLBY TrueHD (5.1ch) / 16:9 (1080p High Definition) / AVC / BD50G / 日英字幕 (ON-OFF可能) ※日英音声  
bonus Blu-ray COLOR / 67min. / LINEAR PCM (Stereo-part Mono) / 16:9 (1080p High Definition)-part 4-3 (1080i High Definition) / AVC / BD25G

※画像は実際の商品画像とは異なります。 ※特装限定版は予告なく生産を終了する場合がございます。 ※特典・仕様等は予告なく変更する場合がございます。  
※4K ULTRA HD Blu-ray のご視聴にはULTRA HD Blu-ray に対応した専用プレーヤー、再生環境が必要です。4K (HDCP2.2対応) 及びHDR (ハイダイナミックレンジ) に対応していないテレビ等でご覧になる場合は、本来の画質では再生されません

AKIRA 4K REMASTER SET 公式サイト: <https://v-storage.bnarts.jp/sp-site/akira/>

発売・販売元: 株式会社バンダイナムコアーツ  
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 1-18-14 恵比寿ファーストスクエア

お問い合わせ先: [バンダイナムコアーツお客様センター] TEL: 03-5828-7582 (午前10時~午後5時/土・日・祝日及び年末年始を除く)

